

「よさこい系および YOSAKOIソーラン系の祭りや踊り」の研究動向に関する一考察 —CiNii掲載論文を中心に—

A Study on Research Trends of “Festival and Dance of YOSAKOI and YOSAKOI Sohran” : Focusing on Published Papers in CiNii Data Base

畑野裕子

Yuko Hatano

要 旨

「よさこい系および YOSAKOIソーラン系の祭りや踊り」に関する研究は、数多くみられるが、研究テーマの動向に関する網羅的で詳細な検討や客観的な分析に観点を絞った研究は、数少ない。そこで、本報では、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター (CiNii) を用いて、「よさこい」「YOSAKOI」をキーワードとしてフリーワードに入力し、それらに関する文献を検索した。得られた論文タイトルをテキストマイニングにより分析し、その結果を中心に、主要論文をもとに研究動向を検討した。

キーワード：よさこい系、YOSAKOI ソーラン系、祭り、踊り、CiNii

1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する研究動向に関して一考察を試みることである。具体的には、CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いた分析を中心に、主要論文をもとに研究動向を検討する。

近年の日本におけるポピュラーな文化イベントをみても、「よさこい祭り」や「YOSAKOI ソーラン祭り」に代表されるような「**祭り」と名打った踊りを中心としたダンスイベントがあげられる。周知のとおり、よさこい祭りは、1954年に高知県の高知商工会議所青年団が戦後復興を祈願して始めたイベントである (よさこい祭り振興会, 2020)。一方、YOSAKOI ソーラン祭りは、北海道大学の学生 (長谷川岳) が、「よさこい祭り」

に感動し、高知県の「よさこい祭り」と北海道の「ソーラン節」を融合させ、1992年に札幌市で「YOSAKOI ソーラン祭り」として開催し始めたイベントである (一般社団法人 YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会, 2020)。これらの祭りは、その後、参加者・観客動員数や祭りの規模の拡大によって、各地に類似のイベントとして普及している。本稿の研究対象の枠組みは、「よさこい祭り」や「YOSAKOI ソーラン祭り」について、派生した祭りを含めた総称として、それぞれ「よさこい系の祭り」や「YOSAKOI ソーラン系の祭り」と解釈していくこととする。これらと同様に、それぞれの踊りに関しても派生した踊りを含め、「よさこい系の踊り」や「YOSAKOI ソーラン系の踊り」と解釈していく。このような解釈に基づき、全体としては、「よさこい系および YOSAKOI ソー

ラン系の祭りや踊り」と称して検討を試みるものである。

この「よさこい系の祭り」や「YOSAKOI ソーラン系の祭り」は、それぞれの開催時期に、テレビ・ラジオのニュースや新聞などのマスメディアによって報道されるだけでなく、近年はインターネットの普及によって、日本国内だけでなく世界にも発信されている。そして、このような文化現象を対象として、人文地理学、文化人類学・民俗学や舞踊学など様々な学問的な立場から、報告されている。

先行研究を概観すると、人文地理学の立場から、内田は、高知市で始められた元祖「よさこい祭り」について、戦後から全国的な展開に至る現在まで、数多く検討している（内田，1992，1994a，1994b，1999，2001，2002，2004a，2004b，2008，2013a，2013b，2018，2019，2020）。また、岩井は、「よさこい鳴子踊りの進化論」として一連の研究を行っている（岩井，2001，2003，2005，2006，2007，2009，2016，2017）（岩井ら，2004）。

矢島は、これらの先行研究を踏まえた上で、「よさこい系」祭りを都市民俗学の立場から、民俗学の現在学・世相解説の史学という視点に立ち、高知の「よさこい祭り」や札幌の「YOSAKOI ソーラン祭り」を中心に、仙台や名古屋における「よさこい系」祭りの動態に関して一連の研究を行っている（矢島，2000，2001，2002a，2002b，2003，2016，2017，2018）。

一方、舞踊学の立場から、増山（1999）は、YOSAKOI ソーラン祭りの拡大に関して、舞踊文化の視点から考察を試みている。また、平田は、上位入賞チームを対象として、「YOSAKOI ソーラン祭り」の参加者意識や演舞構成に関して、開催年度の10年の差異から検討している（平田，2010）。さらに、民俗音楽の立場からは、岩村（2015）は、「よさこい系およびYOSAKOI ソーラン系踊り」の身体技能の特徴に関して、ユーラシアの民族舞踊と黒人の米国大陸のヒップホップ系ダンスとの比較や、高知系よさこい踊りとYOSAKOI ソーラン系踊りの違いの視点から、考

察を試みている。

2020年の最新の著書を見ると、札幌のYOSAKOI ソーラン祭り創立時に学生メンバーとして参加した川竹（2020）の著作があげられる。具体的には、自身の参与観察を交え、「よさこいは、なぜ全国に広がったのか」について、詳細に記している。

また、これら代表的な研究だけでなく、多くの実践も報告されている。しかしながら、研究雑誌や研究論文等を広範囲な情報から収集し、網羅的に分析した研究は、ほとんどみられない。したがって、より幅広く、例えば、学会誌や大学の研究紀要なども含め、情報技術を利用した網羅的なデータ収集に基づき、「よさこい系の祭りや踊り」、「YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関して、客観的な分析に観点を絞って研究動向を検証する必要があると思われる。

そこで本報では、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター（CiNii）のデータを使用して、「よさこい系の祭りや踊り」、および「YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関して文献検索を試み、論文のタイトルに対する計量的アプローチにより研究動向を分析し、その結果を中心に、主要論文をもとに考察を試みることにした。

2. 方法

2.1 対象文献の抽出

国立情報学研究所（NII）のCiNii（NII学術情報ナビゲータ）を使用し、CiNiiに掲載された文献における対象文献の抽出に際し、「よさこい」および「YOSAKOI」の二つのキーワードをもとに検索を行い、どのような文献を対象とするか決定するために、次のような手順を踏んだ。

その際、「YOSAKOI」に関しては、「YOSAKOI」と示されている場合と「YOSAKOI ソーラン」「YOSAKOI SOHRAN」、「YOSAKOI そーらん」と示されている場合がみられた。具体的には、「YOSAKOI」に続く文字の発音は同じであっても、表記が片仮名ではなく、「YOSAKOI SOHRAN」とアルファベットになっていたり、

「YOSAKOI そーらん」と平仮名表記になっていたりするものもみられる。したがって、検索にあたり、「YOSAKOI ソーラン」と全名称をキーワードとせず、「YOSAKOI」をキーワードとして入力した。

このように、本研究で取り上げる「YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」とは、札幌市を起源とする「YOSAKOI ソーランの祭りや踊り」を意味しており、その多くは、「YOSAKOI」とアルファベットで示されているが、必ずしも「YOSAKOI ソーラン」と全名称が同じように示されているわけではない。それにもかかわらず、「YOSAKOI」は、発音が同じであっても、表記と解釈の観点から、高知の平仮名表記の「よさこい」とは異なると認識可能である。

これらを踏まえて、「YOSAKOI」と示されている文献を検索した結果では、ほとんどが「YOSAKOI ソーラン」を含んでいた。その中でも、キーワードをどのような条件で入力するかについて、まずは検索条件別にその数を確認した。なお、検索方法は、フリーワード検索（タイトルだけでなく、キーワードとして挙げられている場合も含まれる）または、タイトル検索、それに加えて、CiNiiに論文の本文掲載か否かというものである。その結果、2020年9月29日時点で、1971年～2020年9月までに掲載された文献をみると、フリーワード検索（本文掲載有り、本文掲載無し）、また、タイトル検索（本文掲載有り、本文掲載無し）の件数の結果をもとに、本稿では、最多件数としてあげられているフリーワード検索（本文掲載無し）結果を用いることとした。2種類のキーワード（「よさこい」、「YOSAKOI」）を各々検索した結果、文献数は、それぞれ「よさこい」が135件、「YOSAKOI」が132件で、いずれも調査対象文献として、それらを抽出した。

これらのデータベースからは、論文タイトルとともに、執筆者氏名、出典、執筆年、論文のページ数が検索可能であるため、それらについても収集した。しかしながら、これら抽出文献には、フリーワード検索内での重複掲載があったため、こ

れら重複文献については削除した。また、この資料整理の段階で、論文名として掲載されているものの、論文の内容とは直接関係のない語句（例えば、**教授大会記念号などの語句）が付随していた場合には、直接関係のない語句を削除した。また、不必要な数字なども同様に削除・整理した。

調査対象の抽出文献をもとに、出典に関して詳細にみていくと、まず、一見、学会誌の名称ではあるが、調べてみると大学学科内の学会名称を有する文献が散見された。そこで、各文献について、オープンアクセスによる詳細な情報を確認した。その結果、学会の規模が全国規模ではなく、会員が学内の限られたメンバーに特定されており、会員資格がオープンな学会ではないと判断された。したがって、大学学科内の学会誌については、大学紀要として整理した。

次に、学会出版物においては、学会本誌だけではなく、一般的な学会発表要旨の学会大会号を含んでいる学会出版物も散見された。特に、特定の年度の学会大会号については、一般的な学会発表要旨を含んでいるものの、他の年度の掲載がなく、個別の分量もみても2ページ以下であった。したがって、通常の学会誌とは異なっていたので、削除することとした。したがって、それ以外の論文について、整理すると169件となり、これらを「一次抽出文献」とした。

この一次抽出文献をもとに、次にあげる文献の出典に関して、調査対象文献を整理して絞り込みを行った。

- ① 大学紀要：大学が発行する研究紀要及び報告書に掲載されている文献（大学学科内の学会名称を有する文献は、全国規模のオープンな学会ではないため、大学紀要に含めた）
- ② 学会出版物：日本学術会議において学術研究団体として登録されている学会が発行する学会出版物に所収されている文献
- ③ 出版社：出版社が発行する研究雑誌などに掲載されている文献
- ④ その他：日本女子体育連盟、日本観光協会、日本レクリエーション協会等

また、1978年～2020年3月までに発行され掲載された文献について、経年の変化を概括するために学習指導要領改訂の先行実施や改訂年の年数を考慮したうえで、本報では便宜上次のように4つに区分（1978年～1997年、1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2020年）し、整理することとした。

2.2 分析の手続き

前述した方法で抽出した「一次抽出文献」の論文タイトルには、学会発表における番号や記号、その他にも直接論文タイトルとは関連性のない名称（文献における特集記事やシンポジウムなどの情報）を含んでいるものが多数あった。今回の分析に関係がないと思われるそれらの情報については、各論文タイトルをチェックして、不必要な情報に関して削除したうえで論文タイトルを整理して、最終的には、169件の「二次抽出文献」のリストを作成した。なお、分析は上記に抽出した論文タイトルに対するテキストマイニングをKH Coder2.00f（樋口，2014，2019）によって実施した。同時に、文献の出典（論文種別）や年代を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、年代別にみた研究動向の推移について検討した。この手法を用いた研究としては、例えば、「総合的な学習の時間」における情報教育に関する研究動向を分析した畑野・森山（2017）や、「保育内容」に関する研究動向を分

析した畑野（2019）の報告がある。これを参考に本報では、以下の手続きで分析を進めた。

- (1) 「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する研究の構造の把握
抽出した文献のタイトルについて形態素解析を行い、論文タイトルに含まれている名詞句、サ変名詞句の出現頻度を把握した。そして、出現頻度上位語句の共起ネットワークを作成し、そのまとまりから研究の構造を解釈した。
- (2) 論文種別による研究動向の差異の検討
出現頻度上位語句の共起ネットワークに、論文種別を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、論文種別による研究動向の差異について検討した。
- (3) 年代別にみた研究動向の推移の検討
年代を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、年代別にみられた研究動向の推移について検討した。

3. 結果と考察

3.1 「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する論文のCiNii掲載状況

「二次抽出文献」169件に対して、「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する研究における文献の出典別と発表年別にクロス集計を行い、表1に示した。

文献の出典ごとに発表年別からみると、大学が

表1 「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する研究における文献の出典と発表年のクロス集計

年代	紀要		学会		出版社		その他		未記入		総計	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
1978年～1997年	4	2.4%	0	0.0%	2	1.2%	1	0.6%	0	0.0%	7	4.1%
1998年～2007年	30	17.8%	15	8.9%	18	10.7%	24	14.2%	3	1.8%	90	53.3%
2008年～2016年	30	17.8%	9	5.3%	2	1.2%	13	7.7%	1	0.6%	55	32.5%
2017年～2020年	7	4.1%	6	3.6%	0	0.0%	4	2.4%	0	0.0%	17	10.1%
総計	71	42.0%	30	17.8%	22	13.0%	42	24.9%	4	2.4%	169	100.0%

発行する研究紀要については、1978年～1997年
が4件、1998年～2007年と2008年～2016年には
30件、2017年～2020年の年代には7件であった。
学会が発行する出版物については、1978年～
1997年は無く、1998年～2007年には15件、2008
年～2016年が9件、2017年～2020年の年代には
6件となっている。出版社については、1978年
～1997年が2件、1998年～2007年には18件、
2008年～2016年が2件となっている。2017年～
2020年は無かった。その他の出版物については、
1978年～1997年1件、1998年～2007年には24件、
2008年～2016年が13件、2017年～2020年の年代
には4件となっている。

一方、文献の出典からみると、大学が発行する
研究紀要が71件で、全体の42.0%と最も多く、続
いて、その他の出典が42件で24.9%、学会発行物
が30件で17.8%、出版社が22件で13.0%である。

また発表年でみると、1978年～1997年の7件
で4.1%、1998年～2007年の90件で53.3%であり、
2008年～2016年が55件で32.5%、2017年～2020
年が17件で10.1%となっている。したがって、
1998年～2007年が全体の半数以上を占めてお
り、最も多く、続いて、2008年～2016年が全体
の約3割であり、1998年～2007年をピークとし
て、1998年～2016年の19年間で、全体の5分の
4以上を占めていることが読み取れる。

以上の結果から、「よさこい系および YOSAKOI
ソーラン系の祭りや踊り」に関する文献の出典を
みると、大学が発行する研究紀要は、いずれの年
代においても最も多く、年代別の件数からみる
と、1998年～2007年が最も多いことを示してい
る。この年代については、「よさこい系および
YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」の実施が増
加しているため（川竹，2020，Pp.52-55）、その
論文数の増加に影響していると推察される。

3.2 「よさこい系および YOSAKOIソーラン系の 祭りや踊り」に関する論文タイトルの形態素 解析

「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭

りや踊り」に関する研究の動向を明らかにするた
めに、論文タイトルにおいてどのような語句が選
択される傾向にあるのかについて、計量的分析を
試みようとして、テキストマイニングによる形態素解
析を行った。その結果、「よさこい系および
YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する語
と文の集計値は、総抽出語数は3,139語（1,631
語）、異なり語数は790語（618語）、文は170であ
った（カッコ内は使用語数）。

抽出語の中でも、まず名詞句についてみてみ
る。表2は、文献のタイトルに使用されている名
詞句のうち、出現回数5以上の抽出語に関して出
現回数を頻度順に示したものである。最も出現回
数が多い抽出語は、「祭り」86であり、続いて「踊
り」27、「地域」24、「都市」18、「文化」15、「鳴
子」14、「祝祭」12となっている。以上のように、
「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭り
や踊り」に関する文献の論文タイトルにおいて、
「祭り」が最も多く、次に「祭り」の中心となる「踊
り」、そして「地域」に関わる「都市」となっ
ている。

次に、抽出語の中でも、サ変名詞句についてみ
てみる。表3は、文献のタイトルに使用されてい
るサ変名詞句のうち、出現回数5以上の抽出語に
関して出現回数を頻度順に示したものである。最
も出現回数が多い抽出語は、「参加」16で、続い
て「進化」12、「活動」11、「考察」10、「展開」
10となっている。すなわち、「参加」することで「進
化」し続けている「活動」と思われる。

表2 出現回数5以上の名詞抽出語(頻度順)

名詞	頻度	名詞	頻度
祭り	86	地方	8
踊り	27	スポーツ	7
地域	24	子ども	7
都市	18	伝統	7
文化	15	チーム	6
鳴子	14	学生	6
祝祭	12	社会	6
現代	10	経済	5
事例	10	集団	5
効果	9	全国	5
イベント	8	大会	5
国体	8	動き	5

表3 出現回数5以上のサ変名詞抽出語(頻度順)

サ変名詞	頻度	サ変名詞	頻度
参加	16	実践	7
進化	12	交流	6
活動	11	比較	6
考察	10	観光	5
展開	10	生活	5
創造	8	変容	5
研究	7	報告	5

3.3 「よさこい系および YOSAKOIソーラン系の祭りや踊り」に関する研究の構造

抽出語間の関連性を探求するために、上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。具体的には、KH Coder を用いて、上位60語の中でも共起の程度(係数: coefficient0.2)に基づいた共起ネットワークで示した(図1)。その結果について、図1から、各抽出語同士の結びつきを俯瞰的にみとめる。

論文に選択される語句の傾向として、表2・表3の出現回数5以上の名詞句と同様に、図1の抽出語間の関連である共起ネットワークにおいて、「祭り」「踊り」「地域」「文化」が中心となってい

る。「祭り」に対しては、「参加」「都市」「祝祭」「現代」「変容」「集団」「生活」が、「踊り」に対しては、「鳴子」「進化」「地方」「大会」が共起している。「地域」に対しては、「事例」「イベント」「展開」「社会」「交流」「実践」が、「文化」に対しては、「創造」「効果」「スポーツ」「伝統」「経済」「全国」「動き」などが共起している。「学生」「チーム」のまとまりについても、共起がみられる。

「祭り」に対しては、「現代」の「都市」「祝祭」、「踊り」に対しては、「鳴子」「踊り」や「進化」「地方」「大会」、「地域」に対しては、「地域」の「事例」や「地域」「イベント」など、相互の語句が共起して、一つの意味をなしている語句と読み取れる。

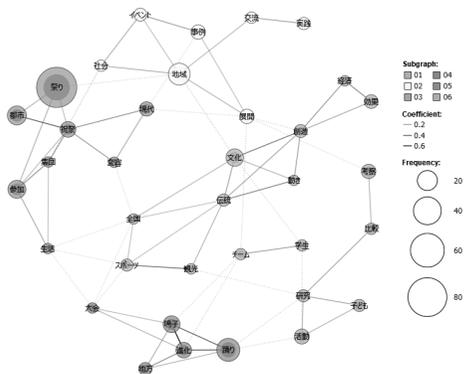


図1 「よさこい系および YOSAKOIソーラン系の祭りや踊り」に関する論文の抽出語間の共起ネットワーク

3.4 「よさこい系および YOSAKOIソーラン系の祭りや踊り」に関する論文種別による研究動向の差異の検討

論文種別との共起関係を設定して得られた共起ネットワークについて、図2に示す。図2において、紀要、学会、出版社、その他に共通な語句は、論文に選択される語句の傾向として、表1の出現回数5以上の名詞句や図1の抽出語間の関連である共起ネットワークと類似し、「祭り」「踊り」「地域」「都市」が中心となっている。「祭り」「地域」「都市」に対しては、どの論文種別においても共起している。紀要に対しては、「祭り」「踊り」「地

域」「都市」「鳴子」「進化」などが共起している。学会に対しては、「祭り」「踊り」「地域」「都市」「参加」「文化」などが共起している。出版社とその他に対しては、「祭り」「踊り」「地域」「都市」「効果」「伝統」「イベント」などが共起しており、町おこし・経済などへの「イベント」「効果」として反映されていると推察される。なお、論文種別ごとに特徴的な語句については、数が少ないため割愛する。

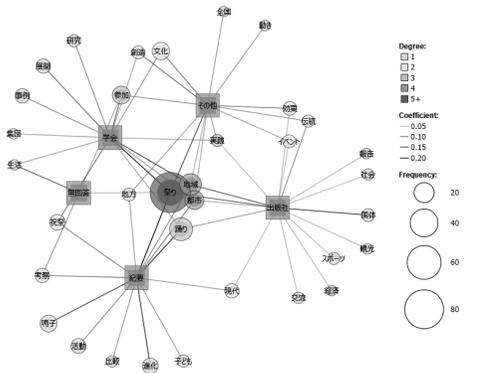


図2 「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する論文種別による抽出語との共起ネットワーク

3.5 「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する年代別に見た研究動向の推移

「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する年代と共起関係を設定して得られた共起ネットワークを、図3に示す。図3において、1978年～1997年、1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2020年の全ての年代に共通している語句は、「祭り」「地域」「都市」であり、「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」の中心となっている。

1978年～1997年と1998年～2007年に共通している語句は、「事例」であり、「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」の研究において事例的な検討が多くなされていたと推察される。1998年～2007年と2008年～2016年に共通し

ている語句は、「踊り」「参加」「考察」であり、「祭り」の中でも特に「踊り」に焦点を当てた検討がなされていたと推察される。2008年～2016年と2017年～2020年に共通している語句は、「イベント」「展開」「祝祭」「活動」「チーム」「子ども」であり、「イベント」としての「展開」や「子ども」の「チーム」「活動」などを対象とした論文と推察される。なお、年代ごとに特徴的な語句については、数が少ないため割愛する。

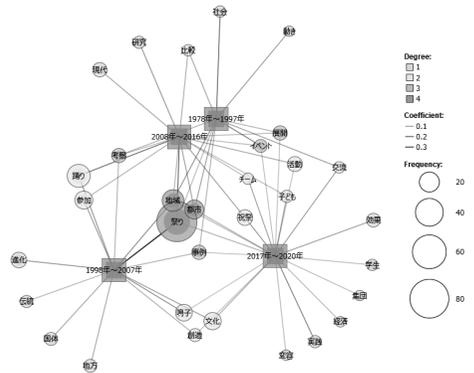


図3 「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する年代別による抽出語との共起ネットワーク

3.6 「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」の研究にみられる抽出語に関する特徴的な研究動向の例

上述したように、「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する論文の CiNii 掲載状況、研究の構造、論文種別による研究動向の差異、年代別に見た研究動向の推移を検討した。検索では、論文において「よさこい」および「YOSAKOI」がキーワードで登録されているものの、タイトルそのものに含まれているとは限らない。しかし、その中でタイトルを検索するという仕組みに限界はあるものの、全体的な研究傾向を把握することができた。その結果、「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関する論文としては、頻度が多く、共起がみられる「祭り」「踊り」「地域」「文化」に関する報告であっ

た。そこで、「祭り」「踊り」「地域」「文化」に焦点を当て、特徴的と思われる論文をあげて、「よさこい系およびYOSAKOIソーラン系の祭りや踊り」に関する研究の動向についてみてみることにする。

まず、「祭り」に関する研究動向としては、内田による高知よさこい祭りに関する一連の研究があげられる。内田(1992)は、都市と祭りの論文タイトルで、高知「よさこい祭り」へのアプローチをサブタイトルとして、「よさこい祭り」の現状を概観することから、一連の研究を始めている。すなわち、「よさこい祭り」の「踊り子隊」と「競演場」という「祭り」における人と場に焦点を当てた研究からスタートしている。引き続き、「よさこい祭り」を高知という地域で実施されるイベントとして、その特徴を社会集団や祝祭空間の視点(内田, 1994a, 1994b)から研究継続し、この地域イベントの事例を中心に検討している(内田, 1999, 2001, 2002)。さらに、長年にわたる高知よさこい祭りの資料収集や参与観察から、内田(2004)は、「よさこいYOSAKOI系祭り」(「よさこい系祭り」)について、本来、「よさこい祭り」は高知市で開催されてきたローカルな祭りであるが、各地で展開する「よさこいYOSAKOI系祭り」(以下「よさこい系祭り」とは、何らかの民謡(の一部)をアレンジした音楽に合わせ「鳴子」を手に踊る複数の集団によるダンスの競演イベントとしている。以上のことから、内田は、「よさこいYOSAKOI系祭り」の意味内容を「よさこい系祭り」の名称において包括し、「祭り」と「地域」「文化」との関わりを研究内容の中心として、継続的な研究を実施している。

しかしながら、内田(2018)は、近年のよさこいYOSAKOI系イベントの実態から、「よさこいYOSAKOI系祭り」が、従来の地域文化という概念とは異なることに関して、次のように指摘している。まず、地域外の参加者・参加団体が少なくないため、地域の人々によるイベントと言い難いことがある。また、踊りの音楽については、「一部に地域の民謡の一節を取り入れる場合が多い」が、チーム所在地にかかわらず、高知や北海道の

音楽を採用したり、異なる場所の民謡をアレンジしたりするという点を指摘している。さらに、このようなことを踏まえて事例をあげている。具体的には、あるYOSAKOIソーラン祭り上位入賞常連チームは、音楽にソーラン節の一節を入れているものの、各地の民謡や音楽を適宜採用したり、北海道民が踊り子として参加していなかったり、北海道以外の演舞テーマであったりすると指摘している。そして、このような指摘をもとに、「現代文化と地域文化の関係を考える際、旧来の地域文化の概念では捉えきれない」と提言している。このように内田の研究は、「よさこい祭り」を「祭り」中心として捉えながらも、よさこいYOSAKOI系イベントに関する一連の研究である。

一方、「よさこい鳴子踊り」の論文についてみると、岩井による「よさこい鳴子踊り進化論」に関する一連の研究があげられる。具体的には、「よさこい鳴子踊り」に関して、よさこい鳴子踊進化論序説(2001)からスタートして、2002年・高知(2003)、第50回よさこい祭り(2004)、100回大会への序曲(2005)、「上町」の地方車から(2006)、「帯屋町」の地方車から(2007)、町内会・商店街チームの展開(2009)と具体的な検討を続けている。

岩井も、よさこい祭りの基本的原則(「よさこい節(地区の民謡)」の挿入、鳴子を持つ)において、信仰の欠落、舞台は道路という特徴に加え、音響機器等の表現手段の変容・進化についても言及している(2001)。「よさこい祭り」を構成するよさこい鳴子踊りを、新聞・文献およびフィールドワークから考察し、その進化を明らかにしようとする一連の研究を行っている。1992年に、札幌市へ伝播した「YOSAKOIソーラン祭り」についても、同様の原則(「ソーラン節」の導入、鳴子を持つ)を述べ、この原則は、「全国各地に伝播・増殖を繰り返していくよさこい祭りの基本として機能していく」としている(2001)。

また、祭りの神事性に言及しており、よさこい祭りは、従来の祭りの神事性概念と異なり、基盤が地域の町内会・商店街がベースで祭りの「場

をしつらえ、まれ人（踊り子）を招聘し、「ハレ」の日を設定するとしている（2007）。さらに、町内会・商店街チームの展開として、かつての「日本人は、祭りでは太鼓を叩き、笛を吹き、歌を歌い、踊りで身体表現し、タテ関係の教育システムを機能させてきた」ことを強調している（2009）。しかしながら、岩井以外に、「よさこい鳴子踊り」と名打った一連の研究は、あまりみられない。

これら内田や岩井のように、高知の「よさこい祭り」や「よさこい鳴子踊り」を中心とした研究は、その後の「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」研究の基盤となっている。さらに、それら研究成果も踏まえて、矢島は、『よさこい系』祭りの都市民俗学として、フォークロリズムの視点からの「都市の伝承母体」を再考している。具体的には、「よさこい系」の祭りは、「原則として鳴子を持ち、地元の民謡などを取り入れて踊る祭り」と定義し、高知（「よさこい系」祭りの本家）、札幌（第一伝播先）、仙台（対象地域拡大例）、名古屋（対象地域開放例）の「よさこい系」祭りを取り上げている。そして、これらの「よさこい系」の祭りの動態から、差異性と統一性を指摘し、「集団となる契機の方法が多様で、身体表現の方法も多様、踊り自体も楽しみを追求したり技を追求したりと、あらゆる面の許容範囲が広く、「祭りの形式が触媒となって人々の感性に訴えるという『刺激伝播』」であり、その人々が存する地域の習俗を呼び起こして創造する祭りである」と特徴づけている（矢島、2015、Pp.1-2、287-288）。

なお、「YOSAKOI ソーラン祭り」の創立に学生メンバーの一人として参加した川竹は、なぜ、よさこいは全国に広がったのかについて、最新の著書（川竹、2020、Pp.82-84）の中で、次のようにまとめている。「YOSAKOI ソーラン祭り」は、高知発祥のよさこい祭りが都市の参加型祭りとして進化し、札幌で1992年に「YOSAKOI ソーラン祭り」が始まり、この祭りの成功を受け、1990年代後半以降に全国展開してきた。さらに、ネットの普及と高速交通網の整備で、交流するイベン

ト祭りの基盤ができたと列挙している。

舞踊学分野からの研究をみると、増山（1999）は、舞踊文化の視点から、「YOSAKOI ソーラン祭り」を検討し、その拡大や魅力に関して、次のように考察している。まず、「YOSAKOI ソーラン祭り」の拡大は、踊りの魅力を前面に出したことにより、地方色が薄れ、普遍性が高まり、他の地域への普及に影響していると推察している。また、踊りの魅力については、「リズムを増幅させる鳴子と元曲である民謡が持つ強い個性」、創作による愛着、パレードによる踊り手と観客との同化をあげている。

また、平田は、「YOSAKOI ソーラン祭り」上位入賞チームの演舞構成を比較し、演舞は時代の文化や流行を取り入れ、10年間で複合化され、独自性や創造性が増していると報告している。しかし、祭りの参加者意識は、10年でも変わらず、観客と参加者が「見る一見られる」関係であり、「自己承認」・「仲間」・「変身」という要因をあげている（平田、2010）。

次に、「踊り」そのものに焦点を当てた研究としては、岩村（2015）の研究があげられる。具体的には、高知の「よさこい祭り」と札幌の「YOSAKOI ソーラン祭り」のビデオテープ、DVD、やYouTubeの映像資料をもとに、代表的な動きを抽出して、身体技法の特徴について検討している。そして、「よさこい系・YOSAKOI ソーラン系のダンスの多くは、基本の構え・あるいは踊りの途中で、両足を大きく横に開き、音楽に合わせて体幹を大きく左右に振る動きがあることである。また、この動きを基本に、180度、90度あるいは360度身体を一気に回転させる動き」と述べている。すなわち、動きについては、体幹の横方向へのスウィングを特徴として捉えている。さらに、「よさこい系・YOSAKOI ソーラン系」について「踊り」という語句ではなく、「ダンス」という語句を使用していることは、興味深い。

さらに、「高知系よさこい踊り」と「YOSAKOI ソーラン系の踊り」の違いに関して、楽曲や踊りの起源（座敷踊りと漁師踊り）に加え、踊りの場

へのこだわり、地元コミュニティとの関わりについて述べている。具体的には、高知のよさこい祭りは、高知市内の各コミュニティや職場から誕生したため「地元」の祭りや踊りとしての意識が強く、沿道の観客の多くが市民で、踊りの場も基本的には「道」としている。その沿道の観客に対する踊りは、「グループで一定の動きがなされる」ユニゾン（スミス，1984）のように、一斉に同じ動きの振りが多いようであることを指摘している。当然、ユニゾンで同じ動きの踊り子が多いほど、迫力も増す（プラム，2005）と思われる。

一方、「YOSAKOI ソーラン系の踊り」については、低重心の横振りの踊りとして、次のように述べている。「多くは、脚を横に開き、体幹をしっかりと支えつつ、思い切り身体を真上または斜め真上に伸ばし鳴子を打ったり、蹲踞の形でポーズを決めたり、片脚を横に伸ばす屈伸でポーズを決めたり、脚を若干開いたままジャンプして、180度あるいは360度あるいは90度身体の向きを変える動作」が特徴的であるとしている。

そして、踊りの特徴については、次のようにまとめている。「脚を大きく開き、横に体幹をスイングさせたり、回転させる動きから感じられるノリは、とくにYOSAKOI ソーラン系の踊りが開発した新しい日本人のノリ感覚でないかと思われる。腰を入れる動作は日本の伝統芸能にも伝統武道にもあったが、体幹を横に大きく（重く）スイングさせたり、回転させる動きは、ソーラン節の踊りの体験をベースに、四方から観客に囲まれ、オープンエアの広い空間で大きく身体動作を見せなくてはいけないという状況、常に立ち位置を変え、移動しつつ躍る激しい躍り、地下足袋というフットギアが存在等が合わさって、世界に今までになかった新しい踊りの身体感覚=ノリを提案しているように思われる」。

以上、CiNii 掲載論文の「祭り」「踊り」「地域」「文化」の抽出語を基に、先行研究を概観し、タイトルを検索するという仕組みに限界はあるものの、網羅的に一定の研究成果を得ることができた。このように、本報では、客観的な方法によっ

て分析し「よさこい系および YOSAKOI ソーラン系の祭りや踊り」に関して、基本的な視点を提供した。そして、それらをもとに主要論文から次のような研究動向がまとめられる。

研究の第1のアプローチは、「祭り」であり、内田（1992）の高知「よさこい祭り」の現状を始めとする一連の研究である。また、岩井も、「よさこい鳴子踊り進化論」として、高知の「よさこい祭り」全般について、一連の研究を報告している。このように内田、岩井いずれも、高知の「よさこい祭り」や「よさこい鳴子踊り」の創設から近年の変遷にわたり、継続的な参与観察や取材・調査というフィールドワークを実施し、「地域」や「文化」を包括した民俗学的な立場を踏まえて検証している。また、内田や岩井の「よさこい祭り」を中心とした研究を踏まえた上で、「YOSAKOI ソーラン」の祭りや踊りに関して、矢島（2015）が研究を積み重ねている。

第2のアプローチは、平田（2010）や増山（1999）、岩村（2015）のように「よさこい祭り」や「YOSAKOI ソーラン祭り」の中でも、それらの「踊り」に焦点化した研究があげられる。いずれの研究結果においても共通することは、「よさこい系」および「YOSAKOI ソーラン系」の祭りや踊りが常に変化し続けていることである。例えば、対象としたCiNii 掲載論文が発行された時点での結果が、現在の祭りや踊りの動態と同じとは限らない。筆者の個人的観察ではあるものの、近年は特に、祭りの規定を除いて考えると、「よさこい系」と「YOSAKOI ソーラン系」の踊りの特徴がボーダーレス化している現象もみられる。つまり、踊り子が祭りの規定に応じて楽曲や振り付けを応用して、「よさこい系」と「YOSAKOI ソーラン系」の両方の祭りに参加し踊っている事例である。このような場合については、「祭り」や「踊り」というよりもむしろ、「祭り」と名打ったイベントとして捉えられよう。そして、そのようなイベントと、その中で展開される「踊り」（ダンス）の動態や変化について、今後も継続して検討することが重要と思われる。

このような本稿の結果を踏まえて、今後の新たな課題について考えてみる。すなわち、学校教育における「よさこい系およびYOSAKOIソーラン系の踊り」に関する検討があげられる。「よさこい系およびYOSAKOIソーラン系の踊り」に関して、概観してみると、松尾(2006)が「南中ソーラン」について言及しているものの、CiNiiの研究論文としては、それほど多くはみられない。周知のとおり、旧学習指導要領(文部科学省, 2008a, 2008b, 2008c, 2008d, 2009a, 2009b)においても、現学習指導要領(文部科学省, 2018a, 2018b, 2018c, 2018d, 2019a, 2019b)においても、体育・保健体育の授業における表現運動・ダンスとは、表現・創作ダンス、フォークダンス、リズムダンス・現代的なリズムのダンスである。文部科学省スポーツ・青少年局によるダンスの種類に関する資料内容において、フォークダンスの中に、日本の民踊として、「ソーラン節(北海道)」や「よさこい節(高知)」が示されている。一方、「YOSAKOIソーラン(北海道)」に関しては、「リズムのダンス(現代的なリズムのダンスなど; 創作ダンス及びフォークダンスに属さないリズムにのったダンス)」の中で示されている(文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官, 2012)。

学校教育において、「ソーラン節」に関してみると、音楽科での民謡の観点からの報告も散見される(鈴木, 2019)。また、教育現場においては、体育祭で「よさこい」や「ソーラン」を発表したというような会話がしばしば聞かれる。さらに、子どもたちの課外での活動(宮辻・河北, 2017)、地域での行事においても取り上げられたりしている。その「よさこい」とは、「YOSAKOIソーラン」に関連する「よっちゃよれ」の踊りを指している場合があり、「ソーラン」とは、「南中ソーラン」を指していることが多いようである。また、既存の「よさこい系およびYOSAKOIソーラン系」の祭りにおける踊りを参考にして、アレンジしていたり、創作したりしている場合もある。いずれも、厳密に言えば、学習指導要領で取り上げられている民踊「よさこい鳴子踊り」や「ソーラン節」と

は、異なるものと推察される。さらに、表記についても、「よさこい」「よさこいソーラン」「YOSAKOI」「YOSAKOIソーラン」というような、学習指導要領では取り上げられていない表記も目にすることもある。このような表記は、いったいどのような踊りを意味しているのであろうか。実際には、明確に記されていないかったり、定義があいまいであったり、混在していたり、創作的な要素が強かったりするという現状もみられる。今後は、このような「よさこい系」や「YOSAKOIソーラン系」の言葉の意味する踊りや、学校教育におけるダンスの学習指導内容に関する再検討も必要と思われる。

文献

- グラム, リーン・アン&チャプリン, L.タリン(著), 碓井節子(翻訳)(2005) 舞踊創作の技法—身体運動の根源に触れる. 新宿書房, p.319, pp.322-323.
- 畑野裕子・森山潤(2017)「総合的な学習の時間」における情報教育に関する研究動向の分析と今後の展望—CiNii掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて—. 神戸親和女子大学児童教育学研究, 37: 165-175.
- 畑野裕子(2019)「保育内容」の研究動向に関する一考察: CiNii掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて. 神戸親和女子大学児童教育学研究, 38: 231-245.
- 樋口耕一(2014) 社会調査のための計量テキスト分析: 内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一(2019) KHcoder3 (<http://khc.sourceforge.net/>) [最終アクセス2020年10月09日].
- 平田利矢子(2010) YOSAKOIソーラン祭りの研究—1999年・2009年の上位入賞チームにみる演舞構成. 東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要, 45: 117-130.
- 一般社団法人YOSAKOIソーラン祭り組織委員会(2020) <<https://www.yosakoi-soran.jp/>> [最終アクセス2020年9月29日]

- 岩井正浩 (2001) よさこい鳴子踊進化論序説.
神戸大学発達科学部研究紀要, 8-2 : 211-224.
- 岩井正浩 (2003) よさこい鳴子踊り進化論 (2) :
2002年・高知. 神戸大学発達科学部研究紀
要, 10-2 : 437-456.
- 岩井正浩・愛宕力也・尾崎菜美子・島田麻衣子・
谷口久美子・新口奈津子・平野緑・藤本愛・
福山恵理子 (2004) よさこい鳴子踊り進化
論 (3) 第50回よさこい祭り. 神戸大学発達
科学部研究紀要, 12-1 : 109-125.
- 岩井正浩 (2005) よさこい鳴子踊り進化論 (4) :
100回大会への序曲. 神戸大学発達科学部研
究紀要, 12-2 : 279-296.
- 岩井正浩 (2006) よさこい踊り進化論 (5) : 「上町」
の地方車から. 神戸大学発達科学部研究紀
要, 13-2 : 117-121.
- 岩井正浩 (2007) よさこい鳴子踊り進化論 (6) :
「帯屋町」の地方車から. 神戸大学発達科学
部研究紀要, 14-2 : 217-225.
- 岩井正浩 (2009) よさこい鳴子踊りの進化論 (7) :
町内会・商店街チームの展開. 神戸大学大学院
人間発達環境学研究科研究紀要, 2-2 : 147-156.
- 岩井正浩 (2016) 「子どもたちの夏 : 高知市南海
中学校のよさこい祭り」. 愛知淑徳大学論集.
教育学研究科篇, 6 : 3-18.
- 岩井正浩 (2017) 「子どもたちの夏 (2) : 高知市
子ども会連合会のよさこい祭り」. 愛知淑徳
大学論集. 教育学研究科篇, 7 : 1-16.
- 岩村沢也 (2015) よさこい系およびYOSAKOIソー
ラン系踊りの身体技能的特徴の一考察. 国際
経営・文化研究, 19-1 : 31-40.
- 川竹大輔 (2020) よさこいは、なぜ全国に広がっ
たのかー日本最大の交流する祭り. リーブル
出版, Pp.52-55, Pp.82-84.
- 国立情報学研究所 (NII) CiNii <<https://ci.nii.ac.jp/>>
[最終アクセス2020年9月29日].
- 増山尚美 (1999) YOSAKOIソーラン祭りの拡大
に関する一考察. 北海道女子大学短期大学部
研究紀要, 36 : 121-130.
- 松尾千秋 (2006) 学校体育における日本の民俗
舞踊の取り扱いー「南中ソーラン」に着目し
て. 日本教科教育学会誌, 29-2 : 1-9.
- 宮辻和貴・河南舞 (2017) よさこい指導に関す
る取り組みについて : 子どもの心とからだに
着目して. ジュニアスポーツ教育学科紀要,
5 : 27-42.
- 文部科学省 (2008a) 小学校学習指導要領. 東京
書籍, pp.110-111.
- 文部科学省 (2008b) 小学校学習指導要領解説
体育編. pp.18-19, pp.75-78.
- 文部科学省 (2008c) 中学校学習指導要領. 東山
書房, pp.85-94.
- 文部科学省 (2008d) 中学校学習指導要領解説
保健体育編. 東山書房, pp.86-95.
- 文部科学省 (2009a) 高等学校学習指導要領. 東
山書房, pp.90-94.
- 文部科学省 (2009b) 高等学校学習指導要領解説
保健体育編. 東山書房, pp.118-133.
- 文部科学省 (2018a) 小学校学習指導要領 (平成
29年告示). 東洋館出版社, pp.179-182.
- 文部科学省 (2018b) 小学校学習指導要領 (平成
29年告示) 解説 体育編. 東洋館出版社,
pp.32-33, pp.145-150, p.179.
- 文部科学省 (2018c) 中学校学習指導要領 (平成
29年告示). 東山書房, pp.123-126.
- 文部科学省 (2018d) 中学校学習指導要領 (平成
29年告示) 解説 保健体育編. 東山書房,
pp.168-188.
- 文部科学省 (2019a) 高等学校学習指導要領 (平
成30年告示). 東山書房, p.134.
- 文部科学省 (2019b) 高等学校学習指導要領 (平
成30年告示) 解説 保健体育編. 東山書房,
pp.156-176.
- 文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官(2012)
ダンスの種類について (平成24年6月13日).
< [http://www.asahi.com/event/dance/dance_](http://www.asahi.com/event/dance/dance_type.pdf)
type.pdf > [最終アクセス2020年10月09日].
- スミス, ジャクリーン M. (著), 林悦子 (翻訳)
(1984)ダンス創作テクニック. 大修館書店, p.67.
- 鈴木慎一郎 (2019) 小学校道徳教科書における「我

- が国や郷土の文化」：日本の民謡に着目して．地域学論集：鳥取大学地域学部紀要，15-2：83-94.
- 内田忠賢（1992）都市と祭り－高知「よさこい祭り」へのアプローチ-1-．高知大学教育学部研究報告 第2部，45：1-15.
- 内田忠賢（1994a）地域イベントの社会と空間（高知「よさこい祭り」へのアプローチ-2-）．高知大学教育学部研究報告第2部，47：1-14.
- 内田忠賢（1994b）社会地理学とその周辺-10-地域イベントの展開－高知「よさこい祭り」を事例として．地理，39-5：1,92-97.
- 内田忠賢（1999）都市の新しい祭りと民俗学－高知「よさこい祭り」を手掛かりに（小特集シンポジウム「現代社会と民俗学の実践」）．日本民俗学，220：33-42.
- 内田忠賢（2001）民俗世界の地理学（8）よさこい祭り（前）．地理，46-12：90-95.
- 内田忠賢（2002）民俗世界の地理学（9）都市の伝統と現在－よさこい祭りの伝播（後）．地理，47-1：76-81.
- 内田忠賢（2004）基調講演1 現代日本におけるダンス・フェスティバルの展開－よさこい/YOSAKOI系祭りを事例に（第55回舞踊学会大会報告）－（シンポジウム報告 ダンスシーンから見た若者文化2）．舞踊学，27：47-49.
- 内田忠賢（2008）よさこい系イベントがもつ都市祝祭の宿命（特集 アートで創る都市の魅力）．都市問題，99-1：73-79.
- 内田忠賢（2013a）よさこいが生み出すコミュニティ（特集 祭りとコミュニティ）．都市問題，104-9：22-25.
- 内田忠賢（2013b）現代祝祭のグローバルな展開：YOSAKOI-SORANブラジル大会．人文地理学会大会 研究発表要旨，2013：96-97.
- 内田忠賢（2018）地域文化とは何か？－よさこいYOSAKOI系イベントを事例に－．人文地理学会大会 研究発表要旨，2018：70-71.
- 内田忠賢（2019）都市祝祭の現在：よさこい系祭りの競技化．奈良女子大学文学部研究教育年報，16：7-14.
- 内田忠賢（2020）戦後復興期の都市祝祭の創出：－高知よさこい祭りを中心に－．日本地理学会発表要旨集，2020：227.
- 矢島妙子（2000）「よさこい祭り」の地域的展開：その予備的考察．常民文化，23：25-42.
- 矢島妙子（2001）「よさこい」の祭りにみる地域性についての人類的考察．常民文化，24：38-50.
- 矢島妙子（2002）祝祭の組織編成にみる都市性と継承性－「YOSAKOIソーラン祭り」における参加集団の分類と特徴．名古屋大学人文科学研究，31：41-54.
- 矢島妙子（2002）札幌市北区新琴似の生活文化の創造過程：「YOSAKOIソーラン祭り」の地域密着型参加集団の歴史・社会背景．生活学論叢，7：3-16.
- 矢島妙子（2003）都市祝祭における「オーセンティシティ」再考－「YOSAKOIソーラン祭り」参加集団の地域表象のリアリティをめぐって．名古屋大学人文科学研究，32：51-64.
- 矢島妙子（2015）「よさこい系」祭りの都市民俗学．岩田書院，Pp.1-2, Pp.287-288.
- 矢島妙子（2016）都市祝祭の継承性：－四半世紀を迎える「YOSAKOIソーラン祭り」－．日本文化人類学会研究大会発表要旨集，2016：E11.
- 矢島妙子（2017）祝祭参加集団の移動の態様：「よさこい系」祭りにおける学生チーム．日本文化人類学会研究大会発表要旨集，2017：C16.
- 矢島妙子（2018）伝播型祭りの展開における変容：－「よさこい」の構造分析－．日本文化人類学会研究大会発表要旨集，2018：116.
- よさこい祭り振興会（2020）<<http://www.cciweb.or.jp/kochi/yosakoiweb/>> [最終アクセス2020年9月29日]

付記

本研究は、JSPS 科学研究費（20K02928）の助成を受けたものである。